〔仏教の美術展によせて〕

中国の仏像と飛鳥仏

―館所蔵像の特異な結紐と衣文を中心に―

大和文華館所蔵の北魏時代石造如来像二点（展観案内の左図と本頁の図１）が特異な服制を持つことのあらましは既に、本欄など（美のたよりNo.97「館所蔵の北魏仏―法隆寺釈迦像との関連」、'91.12.―15日曜美術講座「館所蔵仏像の特異な服制について」）で触れましたが、その特異な部分（結紐と衣文）が中国の他の仏像や朝鮮の仏像を介して、わが国の飛鳥仏の代表である法隆寺釈迦如来像にも繋がるのであり、日本の創始期の仏像における多様性を、その点にも見ることができます。そこで今日は、表題の下に、中国の仏像中における当館像の位置と、更にそれらと飛鳥仏の関連を探ってみたいと思います。

一、中国仏の結紐と衣相の関係

当館像などの胸前の結紐の形式によって止利様式仏像（飛鳥仏）の源流を探る試みを行い（美のたよりNo.81「仏像の胸前紐結びの形式―止利様式仏像の源流の手がかり―」）、その結論として、止利様式仏像の源流は中国の麦積山石窟及びその周辺にあるとして、別に発表しました（「美術史」No.131）が、それらの考察の過程で、中国の北魏から隋までの仏像の胸前（鳩尾の辺り）の結紐には何種類か用途の異るものがあることが分かりました。それらは次のように分類できます。

(1)、僧祇支（大衣の下に着用する肌着）の結紐。これには、巾広のもの、中位のもの（展観案内の左図）、糸のように細いものがあります。また、僧祇支の上に内衣の衿を両側に僅かにのぞかせるものもあり、このように、僧祇支を紐で押さえることは、大衣を開けた状態の幾つかの例が示しています。

(2)、僧祇支とは無関係に胸前で結ばれている割り合いに巾広の紐。〔龍門蓮華洞＝北魏（図2）、天平２年―535―銘像＝東魏など〕これは僧祇支以外の内衣の紐と考えられ、その内衣は僧祇支の上に重ねられて、衿が大衣の下にあるはずですが、その点が明示されていません。

(3)、僧祇支の上に重ねていることを明示する内衣とその結紐。紐の用途としては(2)と同じですが、ここでは内衣をはっきりと表現しています。この例は更に三つに分かれ、(a)内衣の先が紐状に変化して、それが結ばれているもの。〔麦積山第138号窟像＝北魏（図3）、同山の西魏のもの他〕(b)内衣に別の紐を取りつけて結ぶもの〔麦積山第20号像＝西魏〕、(c)内衣の衿が僧祇支の上で合わされ、それを別の紐で押さえるもの〔雲岡第16洞本尊＝北魏〕があります。

(4)、僧祇支のu字形の衿の内側に表わされた内衣とその結紐。ここでは、更に、(a)内衣の衿の先が紐状となるもの〔陝西省博物館蔵・双龕仏像＝北魏＝（図4）〕、(b)内衣を別の紐で押さえるもの。これは(3)―(c)と同様。〔龍門古陽洞北壁第三層第一龕像＝北魏、隴東石窟石拱寺第十一窟西壁像＝北魏～西魏（図5）〕、(c)内衣の衿は両側に僅かに細く表わすのみで結紐だけを正面に示す〔隴東石窟南石窟寺第一窟像＝北魏（図6）〕の三種が見られます。図６では、僧祇支より上方の胸が広く開いて肌を見せ、そこを紐が横切っており、更に、僧祇支にも別の結紐を垂らすという賑やかさです。このような内衣と僧祇支の両方に結紐を示す例は、他にも、内衣が僧祇支の上に重ねられる場合と、下に重ねられる場合の両方に表われています〔藤井有鄰館蔵・天平２年（535年）像＝東魏など〕。

以上の紐の結び方は、蝶結び、片結び、ま結び（結び切って、紐の両端を垂らす）など多種であり、それらが、以上の(1)～(3)の場合にどのような分布を示すか、また、それらは(1)～(3)の分類とも合わせて地域的な特徴が出るかなど、後の考察に待つ点も多いのです。

二、大和文華館像の結紐

以上のように残された問題もありますが、とり合えず、ここで、当館の二像について考えてみます。如来立像（展観案内の左図）の場合は、素直に、(1)の僧祇支の紐でありましょう。蝶結びとして大衣の外に垂らし、極めて装飾的にあしらっているのですし、更に、長く下げた紐は、この像の長い顔や長身という縦に伸びる形状とも呼応しており、また、アクセントにもなっています。

次に二仏並坐像（図１）ですが、これは少々、頭をひねります。結紐は僧祇支の衿の上方にありますから僧祇支とは無関係で、内衣の紐に違いありません。ところが、その内衣が祇支（僧祇支のこと）の上に重ねられているか、下に重ねられているかが不明確です。中国の服制を調べますと、このように胸の上の方で紐を結ぶのは肩かけの類に限ります。また、上記の分類の(4)の場合もそうです（図4、5、6）。ただし、紐の両側に見える内衣の形式は(3)の図３と同様です。判断に苦しむ諸点です。本像は図６と共に稀な例で、筆者は他に類品を見出していません。

三、飛鳥仏の結紐

ところで、わが国の飛鳥仏にも形式の異る数種の結紐が胸前に見られますが、その多くは僧祇支の紐と判断して良く、法隆寺の釈迦如来像（図７）は将にそれで、結んだ紐の先のみを見せているのです。ただし、このように紐の先のみを胸前にのぞかせる例は中国には殆んど見出せず、むしろ朝鮮にあります。飛鳥仏にも、その他に、中

図１　石造二仏並坐像　当館像

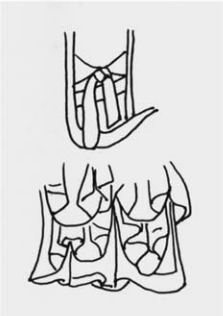


図２　石造如来立像　龍門蓮華洞

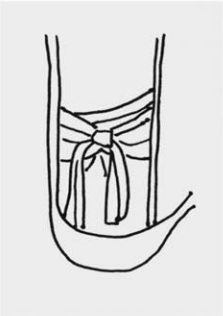


図３　塑造如来坐像　麦積山

図４　石造如来坐像　陝西省博

国仏のように胸前を横切る紐の表現もあります。最も特異なのは、飛鳥大仏と一般に呼ばれている飛鳥寺安居院の本尊で、この像では、胸に合わせた衿をみせ、それを大きな蝶結びの紐で押さえていますが、結び目の個所が非常に大きいのが特徴です。本像の胸前の辺りは後世に補修されていると言うことですが、本像のように僧祇支を合わせ衿で表現する例は、中国では、右肩に覆肩衣というもう一枚の布を掛けていると解釈されるのです。また、蝶結びの紐は当館の立像（展観案内の左図）にもあり、法隆寺の釈迦像は、このような蝶結びの輪の部分を二枚に重ねているか、片結びの輪の部分を立てていると解釈できます。

以上のように、結紐を表わす当館の北魏の二像は、飛鳥仏の源流となり得るものです。また、その内、二仏並坐像（図１）の裳懸座も飛鳥仏（図７）との強い繋りを持っています。

四、中国の特異な衣文

中国の仏像の中には、立像や裳懸座を持つもので、衣の裾や折り返しの部分に衣文の独特な表現を示しているものがあります。それは、布の自然的な描写とは異るもので、形状から、大きく二つに分ける筆者の考えを以下に記してみます。

(1) 鍵形衣文

一枚の布や襞（ひだ）の端が折れているのを表わす際に、滑らかな曲線ではなく鍵形に近い線をもって描写するもの（〰）。龍門古陽洞の北魏の仏像（図８）に早く見えており、それ以前の雲岡の諸仏には現われていません。他に賓陽中洞や蓮華洞などの龍門窟、また、麦積山の北魏の仏像や図5，6にも頻出し、単独像では熙平（516～518）から孝昌（525～527）年間のもの、更に、多少崩れますが北斉～隋にも名残りを示す作例があります。この「鍵形」は明らかに意図的な表現で、北魏後期以後に広い地域に及んだものと思われます。

(2) 瘤（こぶ）状衣文

布の端や裾のU字形衣文の脇に「瘤」のような形が現われているものです（〰〰）。四川省成都出土の像（梁・図９）の裳懸座と山東省の北斉の石仏にあり、北魏には筆者は未だ見出しませんが、朝鮮の百済や高句麗の像に受け継がれています。これも意図的な描法です。

五、鍵形衣文と瘤状衣文の関係

上記の二つの形状は互いに関連があります。つまり、鍵形衣文にも瘤状のものが付随しています（図8）。鍵形衣文は瘤のような形とそれに続く直線とを合わせたもので、この形状の布を平らに広げれば、瘤状衣文に近いものが現われるはずです。即ち、瘤形の部分が大きく広がってU字形となり、その両端に直線的な部分（瘤状衣文の瘤形に当る部分）が生じます。この鍵形衣文から瘤状衣文への変化を示すものは麦積山石窟第８号窟の像に現われている柔かい鍵形衣文（鍵形の直線部が曲線で描出されている）であるかも知れません。

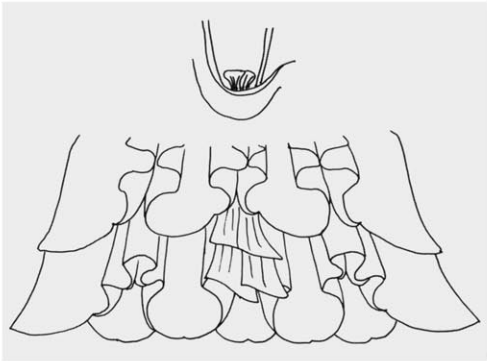


図７　金銅如来坐像　法隆寺金堂

六、文華館像の鍵形衣文

当館の立像（展覧会案内の左図）の大衣や裙の裾に、瘤のようなものと直線とを組合わせた鍵形衣文が見えます。特に、裙の裾では、瘤状が少し垂れた形に表わされるのが特徴で、この形は未だ他に見出していません。しかし、「鍵形衣文」が前述のように北魏の熙平銘像に幾例かあり、熙平銘像には本像のように紐結びを見せる長い顔の像が数点ありますので、本像もその頃とほど遠からぬ時代のものかと考えられます。

七、法隆寺釈迦像の瘤状衣文

次に、わが国の飛鳥仏の代表である法隆寺金堂本尊釈迦如来像の懸裳（図７）に瘤状衣文が指摘できます。中央に外側に歪んだ二つのU字形衣文を形造り、それぞれの内側に瘤状のものを表わしています。同様に両外の半U字形の衣文にも瘤状表現があって、下段にもそれが繰り返されています。この造形は、前述の四川省万仏寺の像（図９）や、朝鮮の百済・高麗の像にみられるものの変形と筆者は考えます。この他にも法隆寺の四天王立像や救世観音立像、広隆寺の半跏思推像（いずれも飛鳥時代）にこの瘤状衣文の変形が見てとれます。この瘤状衣文は前記の通り、鍵形衣文から変化したと考えられるのです。

以上のように、当館の二像が有する結紐と鍵形衣文は、今回は触れませんでした裳懸座と共に、わが国の仏像創始期の飛鳥仏とも密接な係りがあると言えるのです。

（村田靖子）

図５　石造如来坐像　隴東石窟

図６　石造如来立像　隴東石窟

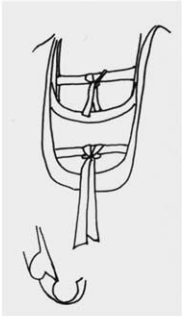


図８　石造如来坐像　龍門古陽洞

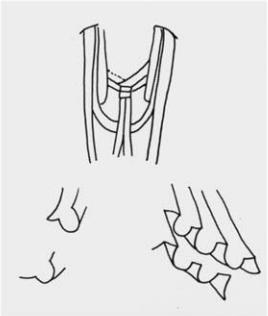
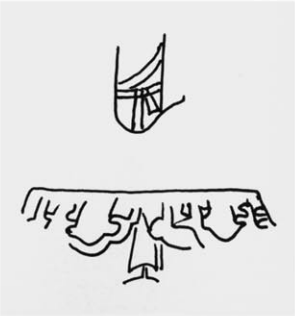


図９　石造如来坐像　四川省出土



季刊 美のたより №103
平成５年５月20日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.